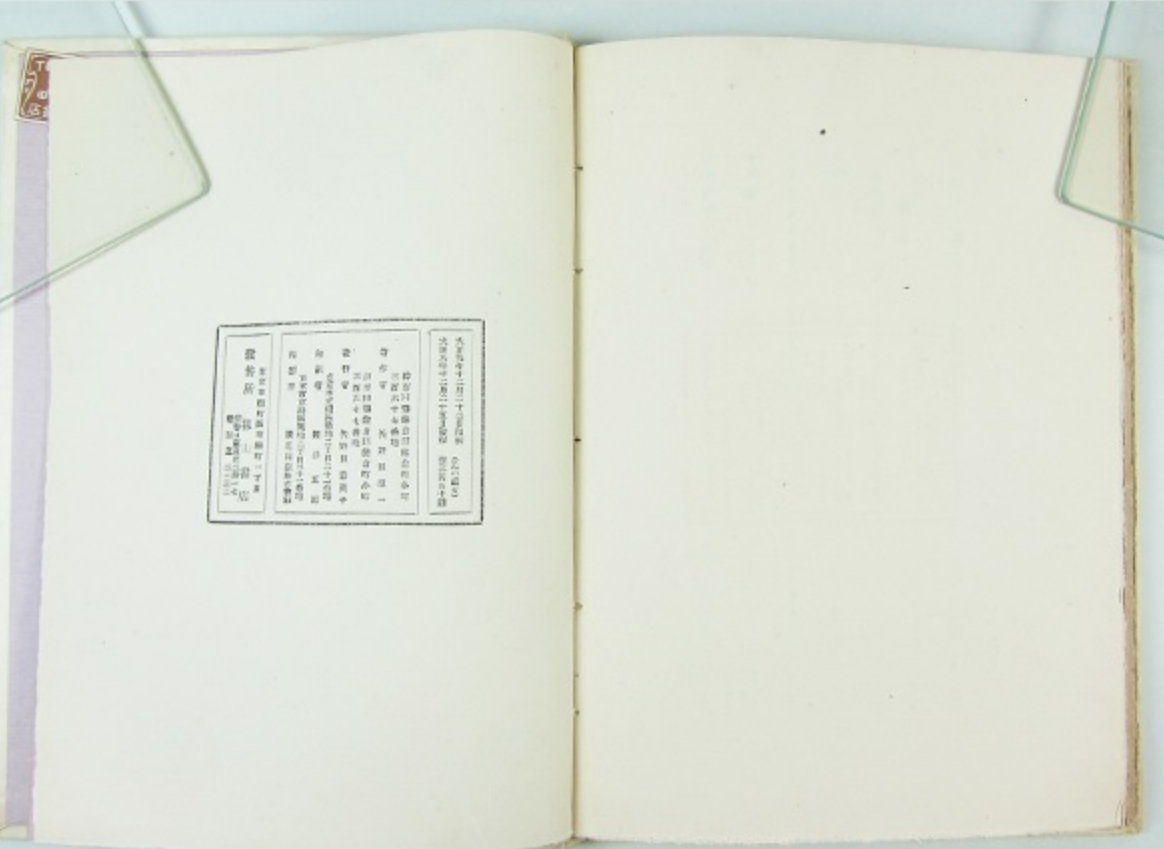
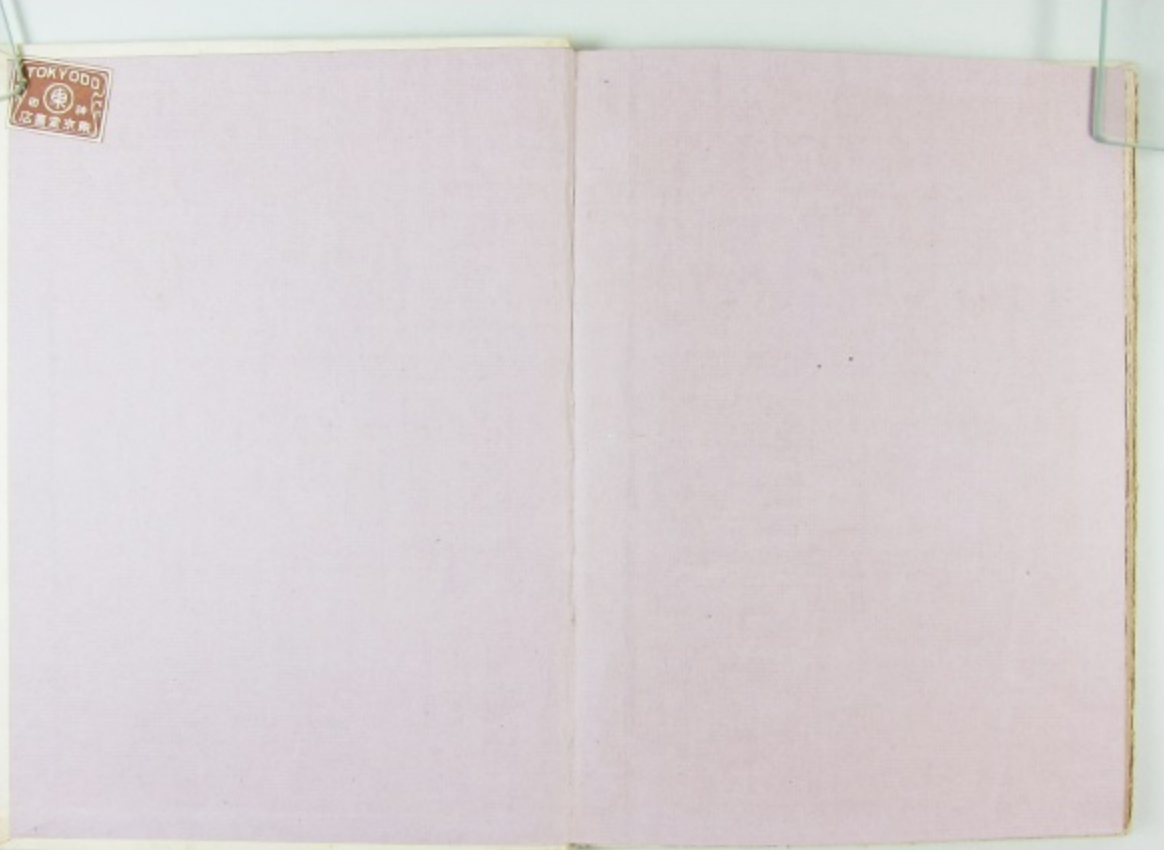
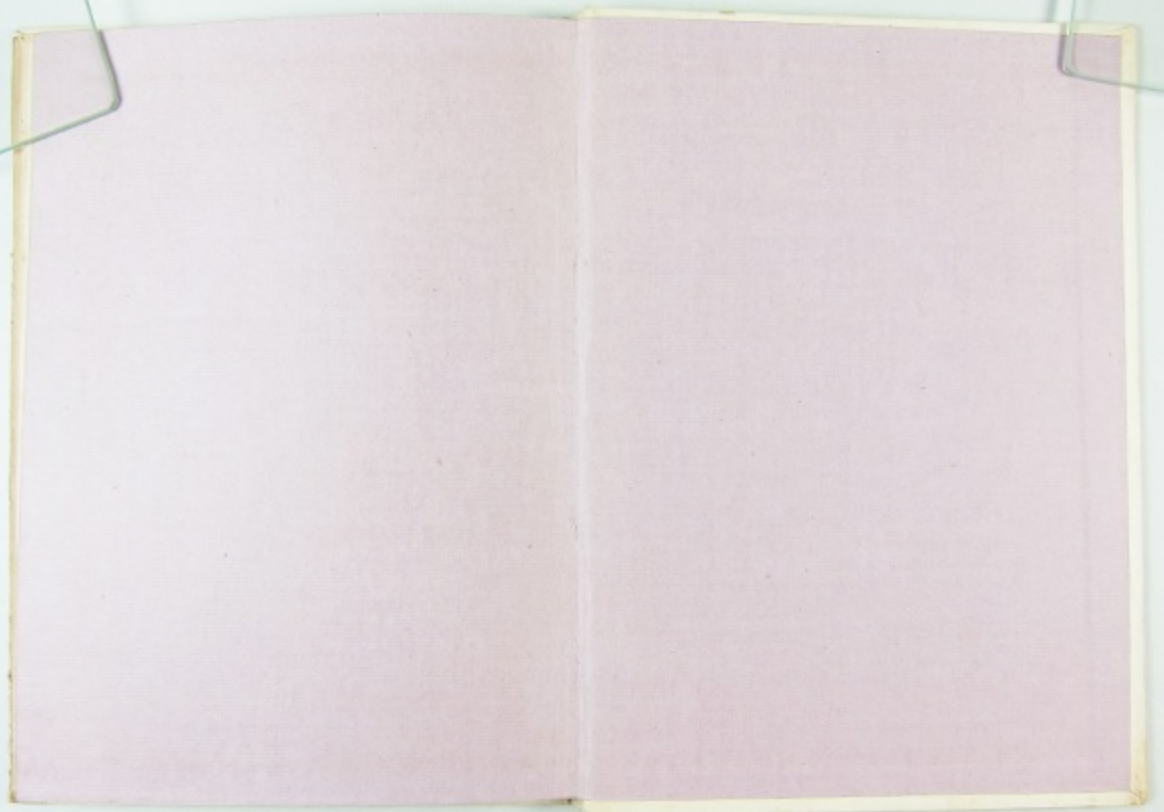
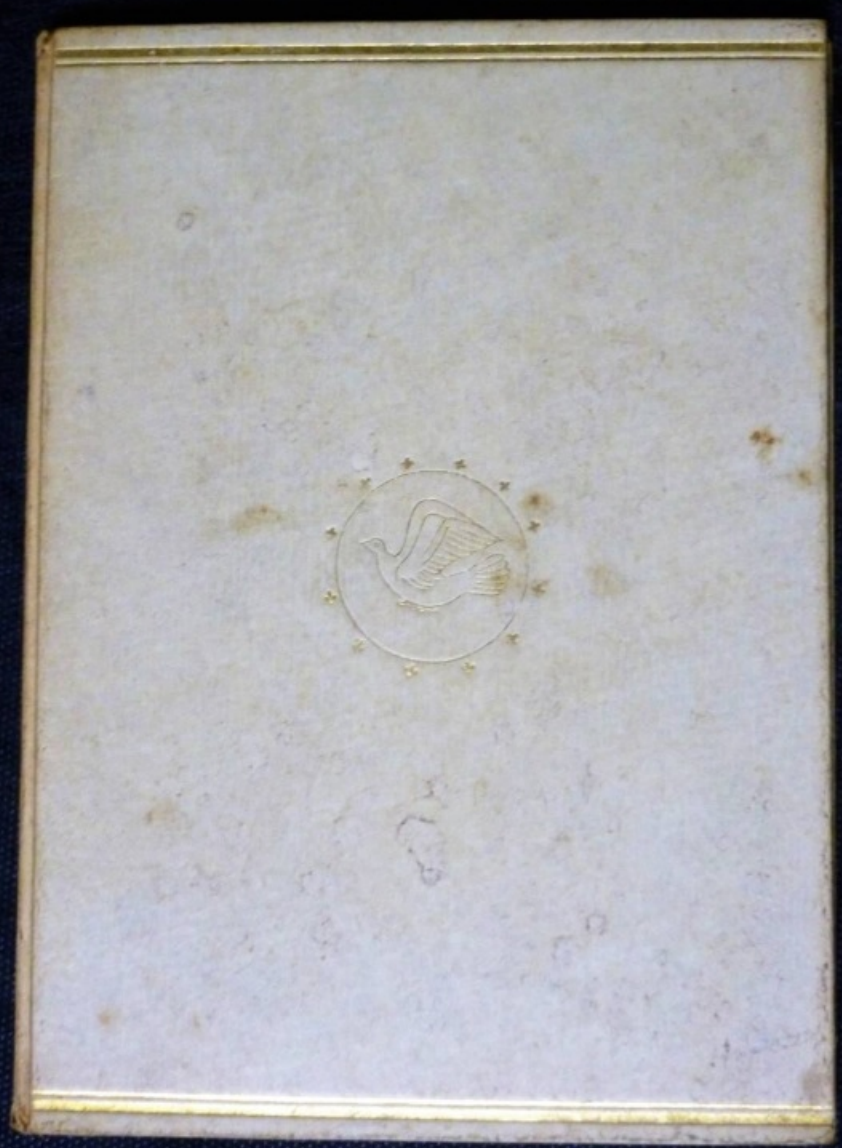


光の處女



矢野目源一



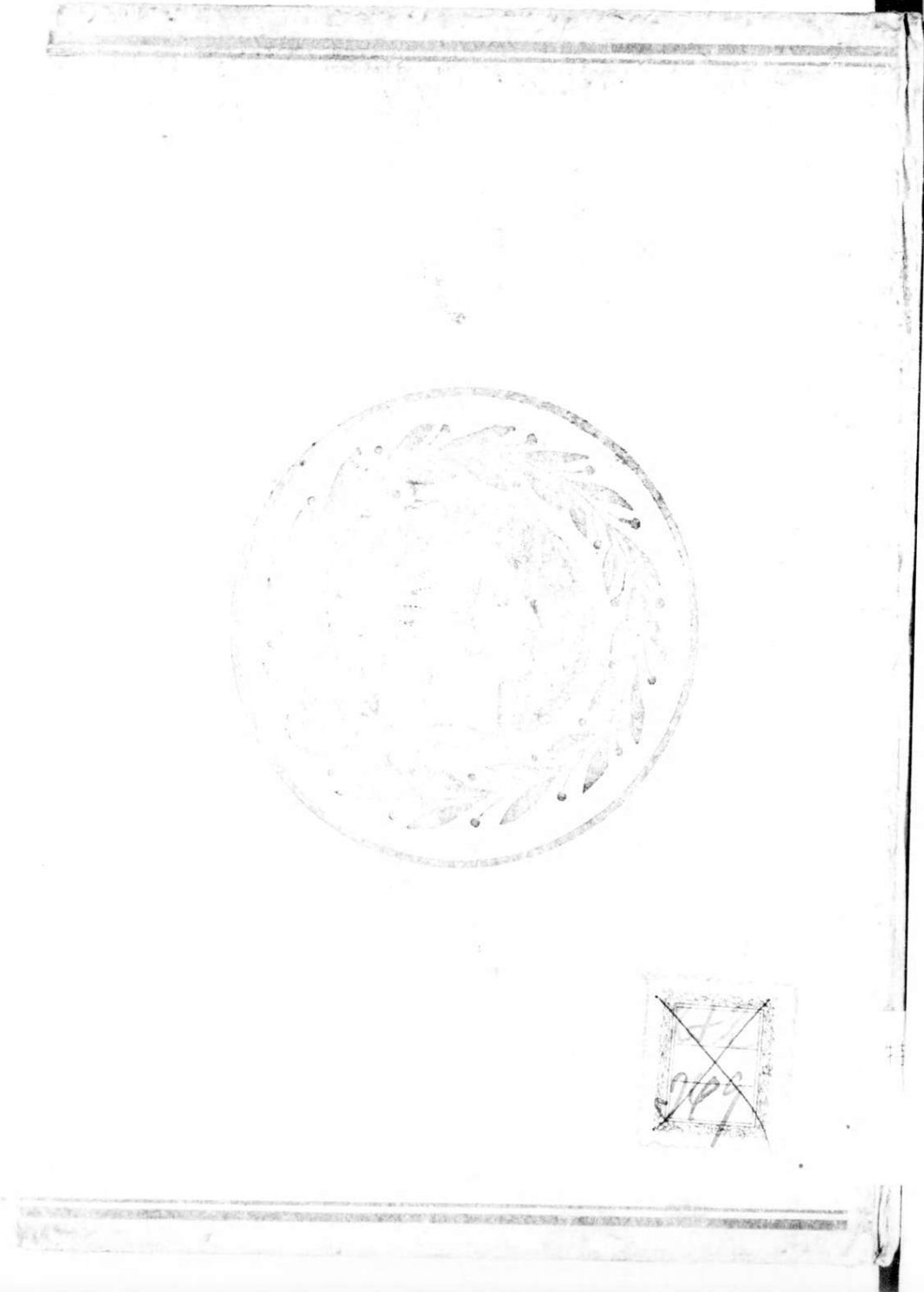


大正九年十二月二十二日印刷 (定本の題名)
 大正九年十二月二十五日發行 價三円五十錢

著者 矢野目源一
 發行所 神奈川縣鎌倉郡鎌倉町小町
 三百六十七番地
 三百六十七番地
 矢野目富英子

印刷者 國井五郎
 東京市京橋區熱地三丁目二十二番地
 印刷所 國光印刷株式會社

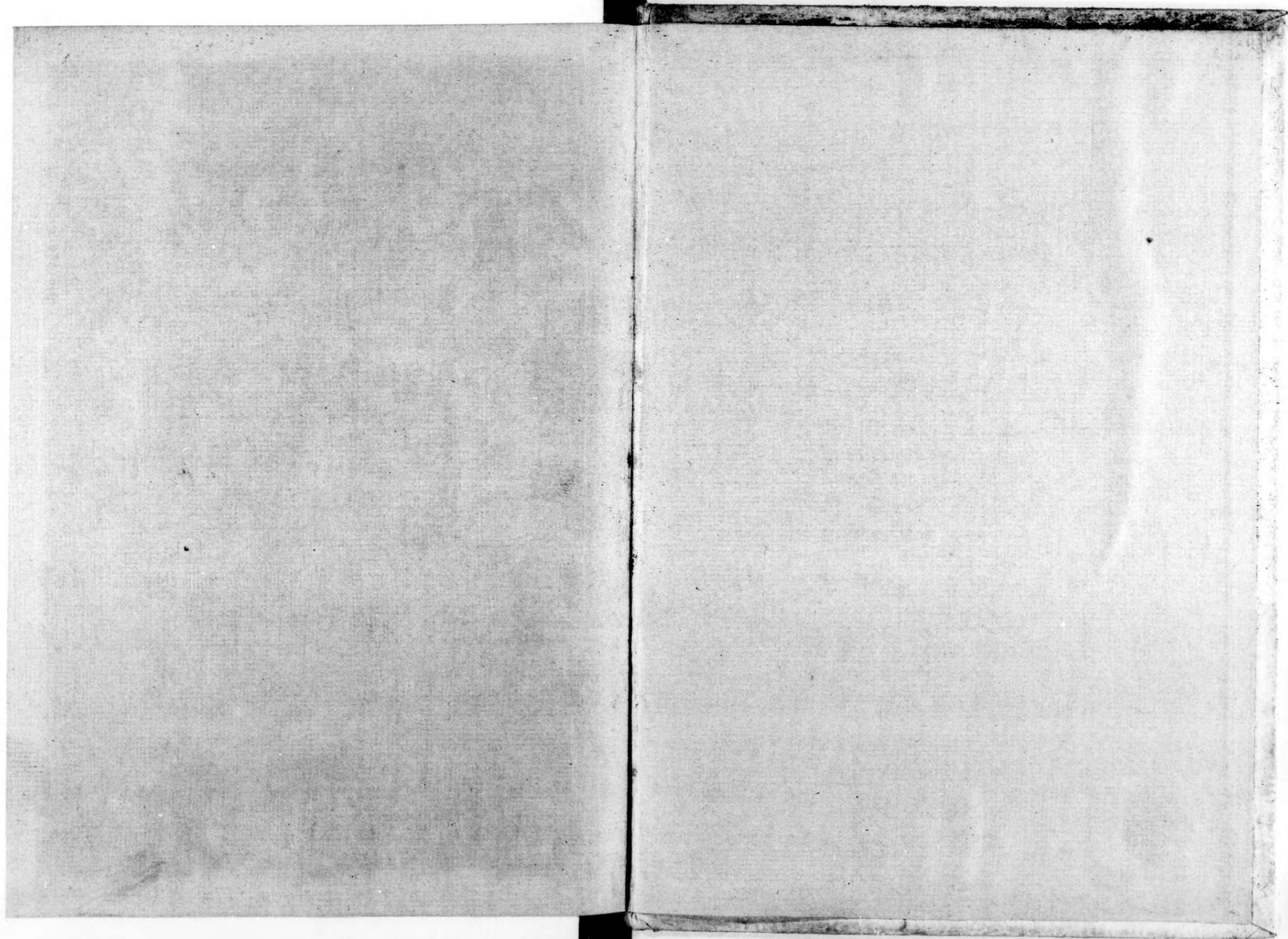
發售所 東京市麹町區有樂町一丁目
 銀山書店
 電話 二二二七
 電話 二二三二



0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20

始



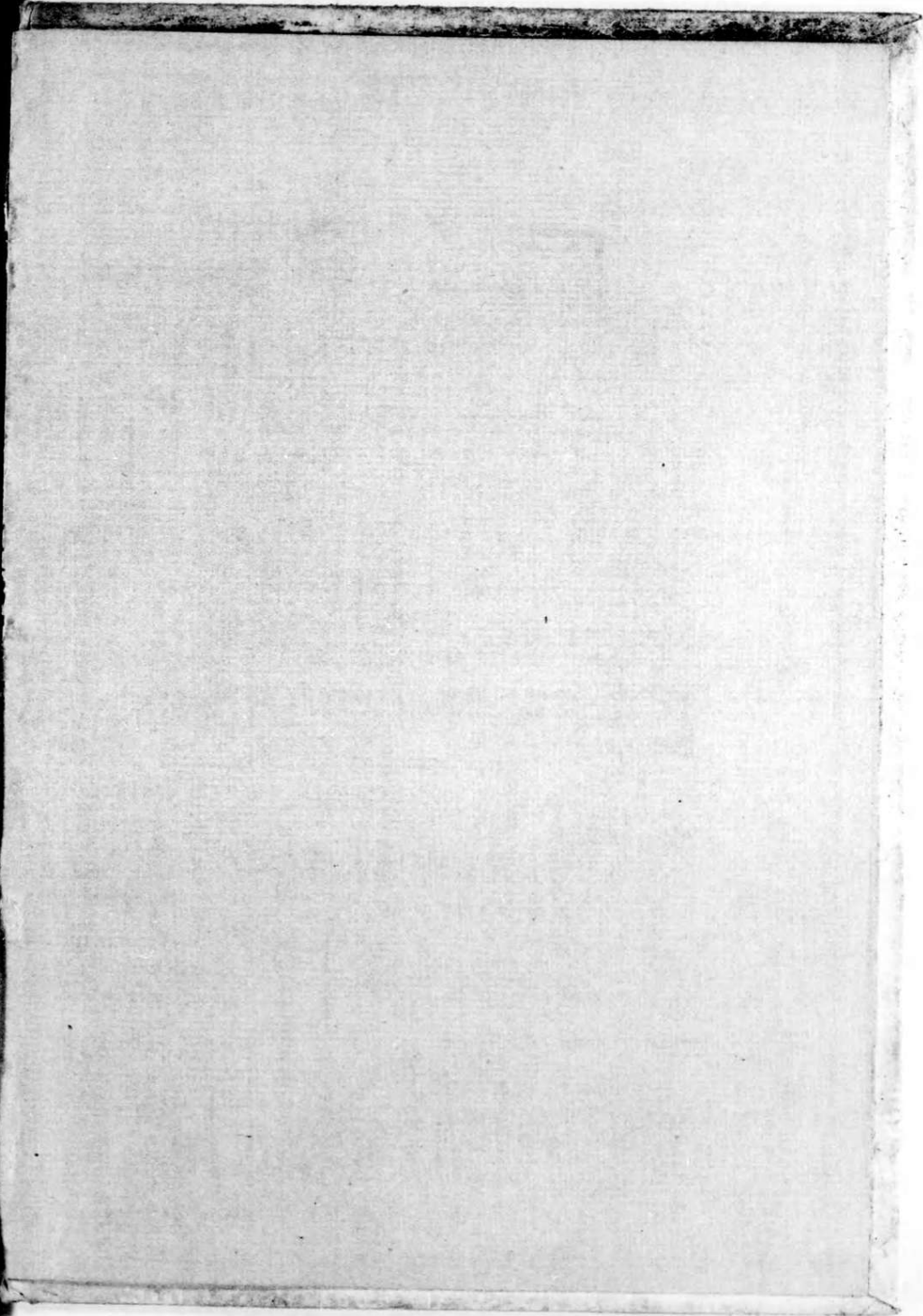


48103
980



詩 集

大正
10 1.17
内交





光の處女

詩集



矢野目源一

千九百二十一年初版

IN MEMORIAM
SPONSALIVM

光の御光



大正二年

十二月

序

「詩王」に聚つた若い詩人の中、矢野目君の詩は聖潔を特徴とする。君の親友である熊田君の詩が宗教に聖潔であるやうに君は藝術に聖潔である。君が十四篇の詩を貫ぬく純潔無垢

の心はここに寶石の光を放ち燦爛として詩天の空に現れた。「うるはしきもの、こころへのよろこび」であることを真とすればこの新しく生れいてた星には不滅の生命がある。

「光の處女」が誰であるかといふことに就ては詩人みづから言ふことを憚るも知れない。然しながら、十三世紀の昔、フィレンツェに

榮えたドルツ・ステイル・ヌオオヴォの詩人中には、矢野目君の聲に應じて琴を奏て得るものがなかつたであらうか。矢野目君は「あてなる心」の持ちぬしてある。ガイドオ・カヴルカントイとともに予もまた、

VEDESTI, AL MIO PARERE, OGNI VALERE.

「思ふに君は値あるものすべてを見給へり。」

光の處女

と答へて、おひさきこもるこの詩人の門出に
嘘したい。

月の出汐の静けさよ。君よ、静かな聲に耳
を傾けたまへ。君みづからの聲、「ドンナ・デル
ラ・ルウツェ」の聲に。

大正九年初冬

竹友藻風



序
詩

われ胸を搏ち、
空のかたへのびあがり、
さて思慕に汗ばむ。

虹色の鐘の音、
やはらかにひろがる
勻ふ寂空。

わが心鳩の如く

見えざる神を
求め飛ぶ。

あはれ
このイカルス、
光に堪へず。

さはれ終りの日までを
翔る思ひを

天そらにつながむ。

光の處女

O splendor di viva luce eterna. D ante

光の處女おとめ惱めるわれに顯現あらはれて、
深き眼差まとしに啓示あかしをたたへ、
杳かなる姿を戀ふる心に、
滅びざる春と優しく微笑ほほえめり。

美はしき調和の方へわれを導く
至高の愛ここにわれと偕なにあり、
王者の如くおほらかに心足たらひて、
若き希望つぞめに踏みもゆく花満みてる路。

敬虔つとましき、されど烈しき祈禱いのちのうち、
再生よみがへの歡喜よろこびにうちひらく眼まなこの前、
輝く處女おとめ、壯嚴の世界に立てり。

われ恍惚に身も痺しびえながら、
けざやけき光となりて翔り出て
ましろき夢に君を護らむ。

明るき時

眞晝海のほとり、
玫瑰の花を摘みすてる手をやすめて、
愛するものの肩越しに
柔らかに耀ふ海に眺め入る。

(御覽。お前が書いてよこした
優しい紫の言葉の花びらが
華やかに波の上に散り浮んで
唄ひ微笑んでゐるのを。)

戀人は眼をあげて私に答へたまへ、
なほも掬つてはこぼす砂の響に
遙かな微風をきいてゐた。

静けさにうち仰ぐ大空。私は見た。
かなた過ぎてゆく雲のなか、
光にさしのべた勻やかな白い指を。

薄 暮

妹富英子に

おだやかに揺れてゐる麥の畑、
蝶がひとつ、疲れて翅をふるふ。
落日の腫のうかがふ木梢に
鳩は野の涯の夜を呼ぶ。

かかるとき私は想ふ妹よ、
遙かなる森蔭に草を藉き、
白い小兒の姿に跪く
爾の魂の優しい祈りを。
泉にうつる合掌は睡蓮の花のやう、

夢は遠く、夢は近く、
ものなべてなつかしく抱きよる
暮れてゆく五月の薄明に

勻のなかにかげりゆく天と地。

雲

北村初雄氏にさしぐ

雲一片
風に飛ぶ。
抗がはぬ
その姿。

光満ち
杳かに、
天壤の
静けさ……
夢現
朗らかに、
澄みわたる
聲。

室 内

柱時計ゆるく四時を打つ……
讀み了へしリイル・アダムを閉ぢ
軽く疲れて身を起す。

絲鞠はおとなしく廻りほぐれ、
うつむきて象牙の針を運ぶ
君のまろき胸と肩は
柔らかき呼吸に昂まる。

窓より入る陽の光は白く
飲みさせる洋盃の縁に輝き
果物の甘き匂を漂はす。

かくて君が静かなる横顔に、
蒼ざめし空を描き雲を浮めて、
杳かなる眺めに心を躍らしむ。

夜の丘に立ちて

月ほのぼりぬ。
恍として夢の姿の美しく、
勻ふばかりの熱情にうちけむりつゝ、
みよ、天心を吹く風は、

月を負ひし雲の群れつどふ
寂しき饗宴のさなかに
青き星宿を花降らすなり。

われ夜の丘に立ちて
追放の現身を歎き、
望郷遠く心悲愁に堪へず。

風景

熊田精華氏にさしぐ

蒼穹に描く圓。

何の鳥かはろばると、

夏の光に酔ひ痴れて……

高丘の松の林に風は寂しく、

山の背をわけて消ゆれど、
茂り響もす夏の聲、
小徑の草に溢れたり。

ここかしこ散らばへる小家に、
人は動けど、聲もなく
ほの青く戻る日射に、
むなしく黄金の空を仰ぐ。

丘に凭りて眠る綿雲、
雪崩の薔薇と輝けば
潮光る方を眺めて、友は
海の近さを想ひ語らふ。

哀歌

故向山堅三氏にさへぐ

忘却の中、微風のなか、
夢のなか、過去すむかのなか、
緩ゆるかに飛ぶ薔薇の雲。
心のやうに美しく、

光の空をはるばると
微笑み過ぎる影の旅。

草の芽よりも柔やわらかな、
空の臥床ふしどはほの青く
山の彼方あそこに涯もなく……

郷愁

われは若く、心驕れども
病める想思はうつらうつらに、
空翔ぶ鳥の通路の
銀の光を追ひ慕ふ。

また彼方濃碧の海に
港を出づる船の心は
舳に白き花を撒く
「希望のまゝに驅られつゝ」
紫金の香にまみれたる
祈の腕をさしのばす。
遠き岬の山々に
強き沈黙の響くとき、

微笑む君が俤は
夢のあなたに輝けど、
心悲しく地に墮ちて
破れし翼をうち振ふ。

夜の空

白き臥床に身を起し
眺め入る冬の夜の荒涼のなか、
心はなほも恐ろしき夢におびえて、
寂しき風と吹き過ぐる
孤獨なるわが魂は

大空の哀しき鏡に映る。

涯もなくさまよふ我か、

驕慢と悔恨に追はれて……

うち仰ぎ祈り沈めば

空かけてきらめきいづる

聖き道の白き大河は、

この胸を勻に浸す。

あゝわが故郷は彼方の空……

夜の愁ひはひろがれど、

病み悩みたる憧憬は、

かしこに母の唄をさく。

われかくて若き力にみちみちて

心は歌ふ。

海のほとりにて

竹友齋風氏にさしぐ

今日も濱邊にたゝすめば、
秋は寂しき波を敷き、
海に沈める大空の
青き姿相をうち眺む。

XXXII

涯のさびしさ身に泌みて、

想ひは揺るゝ波の上、

澳に凝れる舟の帆は

瀕死の蝶と羽搏けり。

幼兒の腫をみひらける

明るき空に白き花、

一輪の陽は咲き凋み

雲の頸に散りかゝる。

XXXIII

あゝ、かすかなる音たてゝ
きらめき飛べる砂粒に、
秋の嘆くをきゝ入りて
心のみ、心のみひとり燃ゆ。

秋の喪

明るき朝のめざめに
鳥はさゞめく、
小さき歌のよろこびは
梢を揺る。

眼に見えぬ鐘の音の空に滅びて、
落葉のみ森の小徑に
寂しき磬をたたけど、
カンパニア、アツビウスの路のほとり、
若きユリアが眠れる姿に
涼しき秋の微笑は玻璃の柩に横はる。
日は瑪瑙、
うららかに空に燃え、

静かなる秋の葬は、
幻の憂愁に歩み入る。

そゞろあるき

二人ゆけど語らひもなく、
聲音も静かに、
ましろき霧の胸を歩む。

路のほとり榛の木のかげ、

黒き小川の薄明に
星は浮み星はゆらめく。

けぶれる森は彼方に……
われらふたり熱き心を
夜の何處に脱ぎ捨てべき。

唄ひいづる草叢の蟲は、
みづからのつゝまじさに心惹かれて。

STÉPHANE MALLARMÉ

L'APRÈS-MIDI

D'UN

FAVNE

Églogue

絶えだえに沈黙を紡ぐ。

二人ゆけど語らはず、
歩をとどめふりかへり、
都市の灯を見る。

牧神

女神メノカミの群よ。爾等なんたらを盡きぬ思ひとならしめむ。

仄かなる肌はだかの色の朗はろかさ、

そは深き眠ねむりにやすらひつゝ

大氣のうちに翔りゆくかとも。

あはれ、われは夢を途へるか。

古き夜のつもれるわが疑惑は、

眞の森の俤宿す繁くかすけく小枝にとまり

ああ、いかにわれとわが身に妄れる薔薇の想念を、
ひとり誇らしげにも献げしか。

静かに思ひ廻らせば……

汝があげつらふ女性等の、

妖しき汝の官能にあくがれ望むものたらば、

牧神よ。かの幻影は浮み出づ、青く冷き眼差に。

いと潔きもののさめざめとうち歎く泉のごとく。

さはれなべての歎息を、汝が身に生ひし毛のうちの

陽に燃ゆる微風の如く、そは對比べて見すと思ふや。

ああ、いな。つかれ果てたる眩暈と身動ぎもせぬそのために。

涼しき朝の甲斐もなきあやしき熱に咽びつつ。

わが笛ふえの音の高鳴りにうちひたされし森中もりぢうに
笛ふえの調しらべはみなながら囁く水と流れ入る。
雙つるなる管くだにもれいづる息吹いきふきの風は競まはひ出て、
乾ける雨に散る音ねの續つくまもなく、
みはるかすさゆるぎもなき地平のかたに、
眼まなこにもしるく澄みわたりたる靈感の
つくりし風は大空のかなたへ高くたちのぼる。

照る陽ひかりとともに光を争ふわが驕れる心の奪ふ、

シシリヤの島の静かなる落窪の、
光り輝く花々のもとに聲もなき岸邊よ。「語れ」
「われここに名手たくみのままに自在じざいなる空虚うつろの蘆あしを折れるとき、
泉いづみのかたに匍匐はらばへる遠き緑みどりの一叢の
海色うみいろ帯びし黄金おうごんの上に、静かなる生けるものの
白き色うごめけるを見たり。
かくて吹き出づる笛ふえの緩き調しらべの曲節まがしにつれ、
白鳥はくちょうは飛ぶあらず。ナイアドの逃れ走りて
水みづに躍とび入る。」

陽かげの燃ゆるばかりなるに、力もうせ、
耳の音調を求むるものに願はしき歡樂にふけるを、
いかなる術すべによるともわかず、そこはかとなぐうち展ひらく。
そのときわれは初めての熱をおぼへて身をもたげ、
古昔こふせの光の波のうち矗た立たてる孤りのわれは、
百合の如く。純き姿は爾らおんみの一人ひとりにも似る。

淫みだらなる唇により、ひそやかに不義ねがひの邪念よこしまを遂げしむる
心やすげの接吻くちくちのそれにはあらで、
愛の證あいのしを覺おぼえざるわが胸こそは、何ともわかぬ宏おほなる
齒牙きばにかかりし不可思議の痕をのこせり。
さもあらばあれ、この奇あましものは心委ゆたぬるよすがにと、
青空のもとに吹き弄あそぶ太たしき對つらの蘆あしをしも選えらびいでつゝ。
頬の惱うれみを己が身に秘めて奏するいと長き調べの中に夢みるは、
わがまどはしのこの歌とほとりをめぐる美うつくはしのものとの間まに
虚偽うつろの混亂みだれによりて美はしきものをこそ歌はむと。

また夢みるは、背中よりはた眞横より、
閉し眼に眺め追ふ、よのつねの夢の姿より、
おのづから調をかへて高鳴れる愛の思ひにさながらに、
鳴りひびく、むなしく單調なる一線を消えゆかせむと。

逃走の樂器。 おお心ねじけしシランクス。 汝われを待てる
湖のほとりにふたたび花と咲かむことをつとめよ。

われはこの驕れる聲をもて長く女神がうへを語らむ。
またわれは偶像を崇むるものの如きさまに、
彼等の影よりなほもまとへる帯をうばはむとす。
かくてわが邀撃にしりぞけられし悔恨をうちらはむと、
葡萄の汁を吸へるとき、笑みかたむけて、
空虚なる葡萄の房を照りわたる眞夏の空にさし上げて、
つややけきその果皮のうち息吹き入れて、
酔はむことなほも欲りしてひねもすにそを透し眺めき。

おおナンフよ。さまざまの「追憶」に胸ふくらさむ。
『わが眼の光蘆のひまよりなべての女神の頸を射れば、
彼等森の空へと立ちのぼる怒りの叫びをより上げて、
視線の傷手を波に浸しぬ。あな、阿古屋珠、
たまゆらにおのゝき消えし丈長髪の水浴みの燦やかしさ。
われは走る。時しもわれの足もとに、
人もなげなる腕さし交はし熟睡せる女性を見たり。
二人なるの嫉ましさは心地死ぬべくおもほえながら』

われ二人ながら捕へ抱き、
眞晝わづかの蔭もなき薔薇の花の陽に映えて、
いみじき薫り漂へるその繁みにと駆けゆくに、
わがみの欣喜はそこに過ぎさりし日にも似たりき。』
われは處女の怒をうけつゝ、なほも犯しがたき
この裸身の重荷のあさましき快樂を慕ひぬ。
そは火と燃ゆるわが唇を逃れむと、
稻妻のきらめく如くもだへて身をば震はしぬ。
秘かなる肌膚のおののきは、われに無情き女性の足より、

にはかに無垢を失ひし怯えたる心に流れ、
狂ほしきさては悲しき歎息にかきくもりうちしめりつゝ。
「恐れ戦き逃れむと慄る二人を捕へたるその欣に氣も空に、
かくもいみじく神々がうちまじへたる接吻に、
髪の亂れを分けしこそ、わが犯したる罪なりき。
かくてわれ、熱き笑ひを一人の女の白き柔肌に、
うちかくさむとしたるとき、(燃ゆる思ひのその姉の
憂苦によりて、汚れなき羽毛の潔さの染まるべく、
世心つかぬ年少きあからめせぬひとり)をば、一つの指にまもりつゝ」

この獲物。いつまでもわれに無情き。絶間もあらず身をもがき、
力もいまは萎へはてしわが双腕をすべりぬけ、
われいまもなほ聲あげて酔へる心地にうち嘆く熱き涙も見返らず。」

いかにせむ——額の角にからげたる紐をたよりに
われを導く、他なるものゝ幸福に。
わが情熱よ汝は知る、なべての柘榴、みのり割れ、

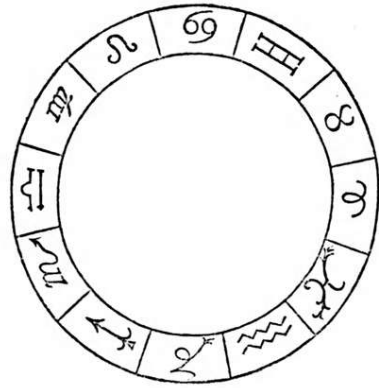
赤紫に熟れたるをまた蜜蜂の音たててめぐり飛べるを。
かくてわが血潮はそれを捉へむと願へるものに魅せられて、
あくがれ望む永遠の群のすべてに流れゆく。
黄金色にまた灰色にこの森の黄葉するとき、
枯枝のかげにさゞめく饗宴あり。
悲しき夢のなりひゞき、炎の命つくととき、
溶けて流れし岩が根をあえかの足に踏みわけて、
エトナよ。汝が胸のうち、かのヴェヌスぞ訪ひ來る。
われはかの女王を想ひ望む。

おお逃るるに術もなき罰……

いな言葉むなしき魂も、

この疲れたる肉身も、
やがて眞晝のおほらかなの沈黙のうちに伏し轉ぶ。
冒瀆の言葉も忘れ、いまはたゞ乾ける砂に横はり、眠入るべく、
またいかにわれはこよなきものと樂みて美酒の味に舌を鳴らせる。

女神の群よ。さらば。われいまは影となりし汝を探ねむ。



目録

序詩.....	1
光の處女.....	15
明るき時.....	8
薄暮.....	11

雲.....	14
室内.....	16
夜の丘に立ちて.....	19
風景.....	21
哀歌.....	24
郷愁.....	26
夜の空.....	29

II

海のとりにて.....	32
秋の喪.....	35
そゞろあるき.....	38

III

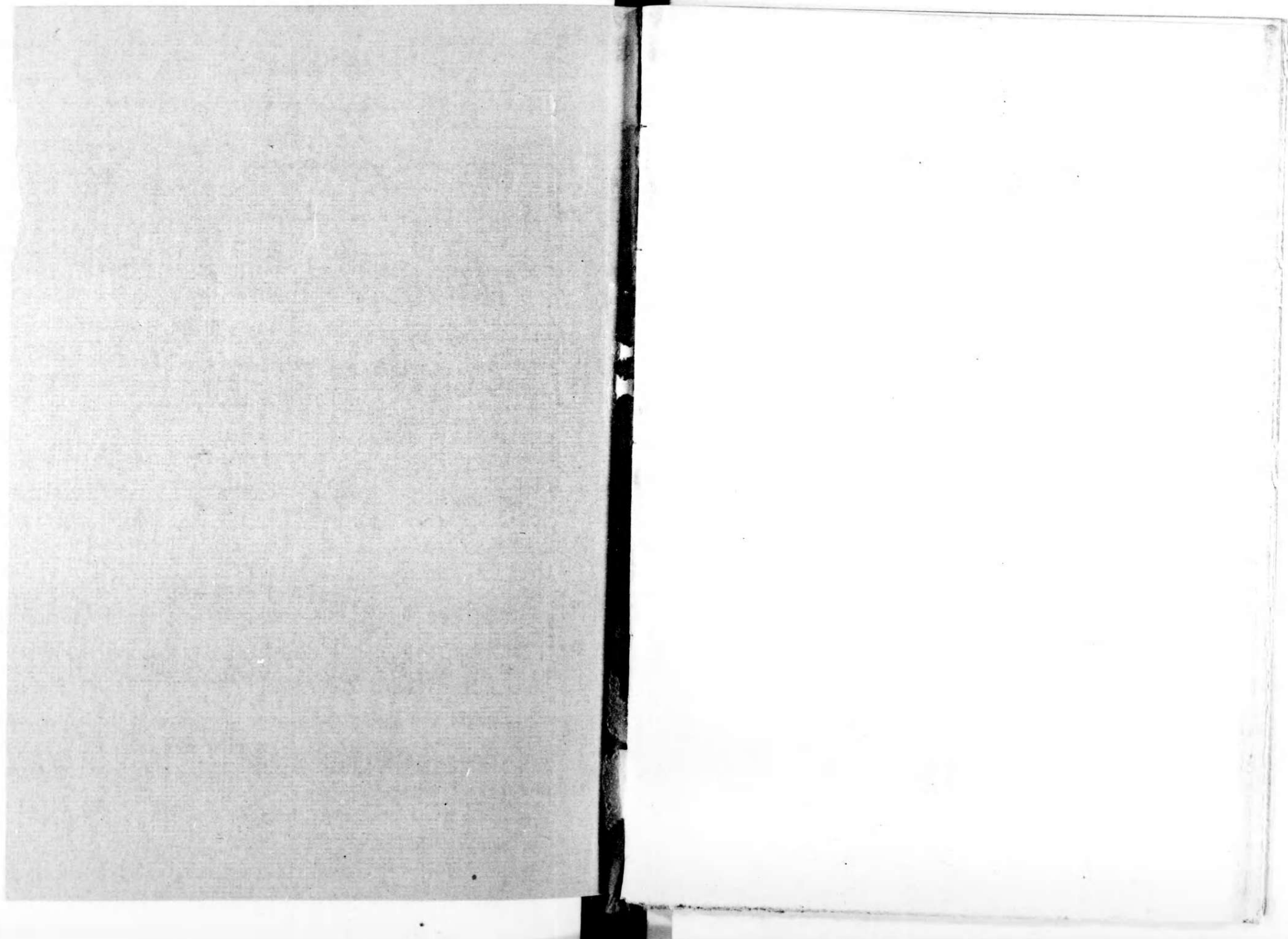
譯詩

牧神の午後(ステファン・マラルメ).....	41
------------------------	----

大正九年十二月二十二日印刷
大正九年十二月二十五日發行 價二百五十錢

神奈川縣鎌倉郡鎌倉町小町
三百六十七番地 著者 矢野 龍一
神奈川縣鎌倉郡鎌倉町小町
三百六十七番地 發行者 矢野日 富英子
東京市京橋區築地三丁目二十二番地
印刷者 國井 五郎
東京市京橋區築地三丁目三十一番地
印刷所 國光印刷株式會社

東京市麹町區有樂町一丁目
發售所 板山書店
電話 芝二三四一七
芝二三四二



151
249

終

